

植村邦彦著『「近代」を支える思想——市民社会・世界史・ナショナリズム——』

太 田 仁 樹

I

刺激的な書物である。本書は、植村氏が熊本大学および関西大学でおこなった「社会思想史」の講義の20年にわたる試行錯誤を、活字にしたものであるという。植村氏はすでにマルクスおよびユダヤ人問題論に関する研究で3冊の著作を上梓されているが、今回の著作は、資料の厳密な検討と、研究史に対する周到な配慮に満ちた従来の諸著作にくらべて、植村氏の近代世界把握、現代的課題の認識、社会思想史についての見方が鮮明に表されていて、読むものに迫力をもって迫ってくる。紹介とコメントをする機会を与えていただいたことを光栄としたい。

植村氏と評者のスタンスの違いをあらかじめ明らかにしておいた方が、読者の理解を助けるかも知れない。評者も社会思想史を専攻分野とするものであるが、もっぱらマルクス主義思想史に特化している。植村氏の領域とはかなり重なると思うが、やはり専門領域の違いは問題の捉え方の違いとして現われるであろう。もう一つ、植村氏は社会思想史の意義として、「思想の実定性／既成性をたえず脱構築することが社会思想史の存在意義だ」(284頁)と述べておられる。「脱構築」という言葉の意味が私には十分には理解できないのであるが、あえて私の立場を言うならば、「対象となる諸思想の観察と分析によりその内容と社会的機能を解明すること」が社会思想史研究であるとするもので、いわば観照の立場であるといえよう。思想史とは経済史や政治史と対等な一領域であり、それらと共同して当該の社会や時代を理解する歴史学の一分野である、と私は考えている。このような社会思想史についての考え方の違いも、個々の思想の理解の仕方の違いとなってくるように思われる。

II

本書の構成は、以下の通りである。

序 章 「近代」とは何か

第1章 市民社会——自由な個人と社会形成——

第2章 世界史——空間の時間への変換装置——

第3章 ナショナリズム——国民的同一性という想像——

終章 いま何が問題か

序章では社会思想史の方法に関する植村氏の立場表明があり、「近代」を支える三つの思想が挙げられる。

立場表明とは、「社会思想史とは、個別社会諸科学を超えてそれらを総合的に把握する、一つの学問分野であり、現在あまりにも専門的に細分化して「社会」のトータルな認識を忘れがちな個別社会科学を、歴史的＝批判的に点検し相対化する意義と役目をもつ分野でもある」(5頁)というものである。先にも述べたように評者には、このような社会思想史観は、思想史研究を他の専門分野に対して特権化するもののように感じられる。

「近代」を支える三つの思想とは、第1に、「方法論的個人主義に基づく社会契約論と経済学によって確立した「市民社会」の思想」であり、第2は、「地球上の多様な諸民族・諸文化を時間軸上に序列づけ、「進んでいる／遅れている」という価値づけを生み出すことで、「進んだ文明」諸国による「遅れた未開」諸地域の植民地支配を正当化するイデオロギーとなった」「世界史」という思想である。第3は、「「国民」という枠組みにおいて想像／創造された、自分が帰属する共同体とその文化を至上のものとし、自己中心的で排他的な帰属意識である」「ナショナリズム」である(9—10頁)。

第1章では、「市民社会」の思想の展開を、ホッブズ、ロック、スミスを中心にたどり、それらを批判するものとしてマルクスの経済学批判とアソシアシオン論が位置づけられる。この章で検討される対象はイギリスの諸思想であり、それについての研究はすでに膨大なものがある。植村氏は研究史を踏まえつつ、独自の観点からイギリスにおける「市民社会」の思想の成熟を要領よくまとめている。ホッブズの男女平等論への着目、ロック、スミスのアメリカへの言及に対する注目などには、氏の問題関心が示されている。

章末で、マルクスの経済学批判＝市民社会批判が、「ロック以来の所有論の「脱構築」であった」(66頁)こと、マルクスの展望したアソシアシオンが、「「古い市民社会」に取って代わる社会の在り方なのであり、いわば階級対立のない「新しい市民社会」なのである」ことが確認されて、「市民社会」の思想が締めくくられる。マルクスのアソシアシオン論の理解については、後ほど問題にしよう。

第2章では、「世界史」の思想の展開とマルクスによるその批判について説明がなされる。「世界史」の思想とは、端的に言えば、「ヨーロッパの文明社会＝市民社会を「歴史の最終段階」と見なし、アメリカ・アフリカ・アジアというそれ以外の同時代空間を「私たちの世界、私たちの時代」に先行する過去の諸段階として序列づける、そのような他者認識の変換装置」(129頁)のことである。植村氏は、ロックにはすでに明瞭にこのような思想があったと指摘し、さらにモンテスキュー、ヴ

オルテール、ルソー、スミスの所説を検討し、ヘーゲルにいたって完成されたと結論する。さらにこの章では、日本における「世界史」の思想の受容の仕方も検討され、福沢諭吉、岡倉天心、白鳥庫吉、田口卯吉のアジア認識が、「世界的規模での植民地化を「文明化」の使命という名で正当化したヨーロッパ中心主義を受容し、ヨーロッパ人の眼でアジアを見る視線を内面化したうえで、その視線を自分以外のアジア諸国に向けるにいたった「屈折したヨーロッパ中心主義=自民族中心主義」(126頁)であったことが明らかにされている。

このような「世界史」の思想に対抗するのがマルクスであり、彼にとって「問題は、「資本」対「それ以前のすべての段階=人類の局地的諸発展」であり、資本による「世界史」の創出を批判的に明らかにすること」であった、と植村氏は言う。氏が注目するのは、『経済学批判要綱』における「資本の文明化作用」についての叙述である。また氏によれば、『経済学批判』における「アジア的、古典古代的、封建的」生産諸様式が「相次ぐ諸時期」をなすという記述は、「生産諸力の発展段階」の論理的序列という意味であり、後の多くのマルクス主義者が、ここに単線的=継起的な発展段階を読み込んだのは、「世界史」のイデオロギー的幻想の罠に陥ることにほかならない(139頁)ものであった。植村氏は、晩年のマルクスにおける非資本主義的発展の可能性に関する発言と、『要綱』の「資本主義に先行する諸形態」論とを重ね合わせている。この問題に関する植村氏の理解は、かつてわが国でおこなわれた晩年のマルクスの「ロシア論」をめぐる議論に照らすと、疑問がある。これについては後ほど検討したい。

第3章では、ナショナリズムというイデオロギーの成立とマルクスによるそれに対する批判が検討される。ナショナリズムを社会思想史の対象としたこと自体が、植村氏にとっては一つの決断であった。「ナショナリズムは、一方では「国民」の存在自体が自明の事実問題だとみなされたために、他方では、その非合理的情緒性が社会科学の対象としてなじまないとみなされたために、これまでの社会思想史のテーマになることはほとんどなかった」(164頁)にもかかわらず、氏はあえてそれを組み込んだからである。植村氏は、「国家が不可分の精神的な共同体として定義されることによって、その構成員としての「国民」もまた、一つの精神的な存在となった。統治者の側が、そのようなものとしての「国民」を意図的に創出しようという思想、それがナショナリズムに他ならない」(171-172頁)と、ナショナリズムを捉え、その思想の発生をルソーに見出す。以下、トマス・ペイン、ジェファーソン、シエース、ヘーゲルとたどり、フィヒテにおいて「人種主義とナショナリズム接合」が確認される。ついで、前章と同様、日本へのナショナリズムの輸入の特徴を明らかにしている。検討されているのは、本居宣長、会沢正志斎、森有礼、馬場辰猪などであるが、この章の叙述は思想内容の検討よりも、政治過程や国民化政策の捉え直しによって、ナショナリズムのイデオロギー性を暴露することによりかなりの紙数が費やされている。

この章も、マルクスの批判的思想の内容を確認することで締めくくられている。ナショナリズムに対置されるものは、インターナショナリズムである。このマルクスの思想はマルクス主義ヘナショナリズムが浸透することにより失われたとされている。またルクセンブルクなどのインターナシ

ヨナリズムは、ナショナリズムの根強さを認識しそこなったものであると評価される。ここで注目されるのは、『共産党宣言』における「労働者は祖国をもたない。……プロレタリアートはまず政治的支配を獲得し、国民的階級に上昇し、自己を国民 Nation として構成しなければならない、という点で、それ自体やはり、まったくブルジョアジーの意味においてではないとはいえ、国民的である」（218頁）という章句の解釈である。この点についても後ほど検討しよう。

終章は、現在考えるべき問題は何かについて、植村氏が示唆を受けた諸思想が紹介されている。植村氏の思想的立脚点を知ることのできる章ともいえよう。取り上げられているのは、フェミニズム、従属理論あるいは世界システム論、脱ナショナリティ論である。これらは、並列的に取り上げられているのではなく、マルクスのアソシアシオンの思想を脱構築／再構築する際の手懸かりとして取り上げられている。

Ⅲ

植村社会思想史の構図の大きな特徴は、「市民社会」、「世界史」、「ナショナリズム」という3本の柱を、近代を支える思想として取り出し、近代の諸思想をこの3側面から立体的に再構成していることである。近代社会思想史の概説書は、西欧思想の展開を中心に叙述し、その日本への導入を付随的に説明するという構成をとることが多い。植村氏の構図が通例の概説書のそれと重なるところは市民社会についての思想の展開の部分だけであるが、本書の狙いは「市民社会」以外の柱を立てるという単なる拡大ではない。3本柱の思想が「近代」というシステムを支えているという、思想の社会的機能の解明により、同時に「近代」というシステムの批判的な解明をもあわせておこなっている。その意味では、本書は植村思想の開陳の書ともなっているのである。

植村氏はマルクスの思想をベースに、それを「脱構築」することによって自分の立脚点を築こうとしている。終章において肯定的に言及される三つの思想潮流がその際の手懸かりになっているようであるが、植村氏が特に重視しているのは、脱ナショナリティの思想であるように思われる。従属理論＝世界システム論は、歴史認識としてこの脱ナショナリティ思想を支える位置を与えられている。本書の3本柱も、植村氏の立脚点をこのようなものと考えれば理解しやすい。フェミニズムの視点が本論の三つの章の中でどのように活かされているのかは、私には読みとりにくかったが、世界史とナショナリズムの章の叙述は迫力にあふれている。「世界史」の思想の形成の背後には、資本の世界的規模の展開がある。この資本の世界的展開がそのまま、グローバルな観念を生み出すのではなく、独特の「他者認識の変換装置」により、自民族中心主義を生みだし、それが後発諸国におけるナショナリズムという姿をとって登場するメカニズムを、植村氏は見事に描いている。資本主義世界システムが、世界国家を生み出すのではなく、国民国家を単位とするインターステイトシステムとして登場することの意味を、思想史として描くことに成功していると言ってもよい。この成功が、本書を類書から際立たせるとともに、刺激的なものにしているのである。

IV

本書は刺激的な書であるがゆえに、疑問を誘発する書でもある。

まず本論の章題の意味から考えてみたい。三つの章はそれぞれ「市民社会」、「世界史」、「ナショナリズム」と題されている。前二者は、「市民社会」の思想とか「世界史」の思想と呼ばれることもあるが(9頁)、「ナショナリズムの思想」という表現は用いられない。前二者にしたがえば、「国民」の思想」とでも呼ぶべきではないかと思えるが、植村氏はそれを避けている。このことは、脱ナショナリティということを経験する植村氏が、「市民社会」や「世界史」という実体を認めても、「国民」という実体を認めることを拒否するという立場に立っているような印象を与える。「国民=Nation」の形成は、ゲルナーとA.D.スミスの論争を経ても、いまだ十分に解明されていない問題であるが、植村氏は脱ナショナリティという志向性からか、「国民」の実体的存在を認めたくないように思われる。これはアンダーソンの「想像の共同体 Imagined Communities」の解釈にも関わる問題である。植村氏は、この「国民」という共同体を、実体を欠いた、錯視の所産のように解釈されているのではないだろうか。カウツキーが「国民」という実体が存在するかのよう(223頁)な叙述をしていることで、非難されていることも、植村氏の「国民」観を伺わせる。

しかし、上からつくられたものであるとしても、近代世界において「国民共同体」という実体は存在していると考えざるべきではないであろうか。ウォーラスティンによれば、近代のインターステイトシステムの成立は、1648年のヴェストファーレン条約による諸国家間関係の設立を画期とする。近代国家は主権国家であるということが、中世の領邦国家との大きな違いであるが、主権国家は、その統治者が被統治者の利害を代表するという意味で国民国家となることを目指す。上からの「国民共同体」の形成である。これは絶対主義権力がすでに追求したものである。「国民共同体」は民衆の側からいえば、権力に対する参与の増大を意味し、この下からの動きのない「国民共同体」は脆弱である。国家をもたない民族のナショナリストたちが、自前の国家をつくって、「国民共同体」をつくろうとする運動がナショナリズムであるが、既存の国家の強大化をめざす運動もナショナリズムである。ナショナリズムは、18世紀後半のアメリカ革命とフランス革命以後、19世紀にはヨーロッパ全体に広がり、20世紀には地球規模の動きとなり、現在に至っている。

ナショナリズムを考えるうえで、「国民共同体」の実在性と重要性は疑うことができない。20世紀の初頭には、中心部では「市民社会的」構成をとり、半周辺部では「身分制的」構成をとるという差異があるにしても、世界システムの中心と半周辺には、「国民共同体」という実体が出来上がっていた。「国民共同体」は当該領域の住民全員を含むものではなく、そこから排除された「賤民」的存在があることに注意すべきである。また周辺地域は植民地にされたので、当然「国民共同体」は成立しなかった。世界システムとは、国家権力と「国民共同体」を媒介とする諸民族のヒエラルキーであると言えよう。

マルクスのインターナショナリズムは、「国民共同体」が強固な地域では共鳴盤を見つけることが

出来なかった。1890年以後のドイツ労働運動の伸張は、労働者たちの「国民共同体」への統合・参加を意味するもので、マルクス主義は労働運動に便乗していたが、労働者の間に根を張っていたわけではなかった。第1次大戦勃発時のSPDの多数派の戦争協力は、ドイツの労働者大衆が「国民共同体」の成員となっていた事実を反映したものであった。カウツキーやルクセンブルクたちの修正主義批判は、ドイツの労働者大衆の現実とは乖離していたのである。

「ナショナリズムの根強さを認識しそこなった」のは、ルクセンブルクだけではない。マルクスやエンゲルス自身、Nationを正面から問題にすることはなかった。植村氏が引用している、『宣言』におけるNationに関する記述はこのことを示している。そこでは民族的対立は「ブルジョアジーの発展とともにますます消滅している」とされているのである。このような認識では、インターステイトシステムにおける諸民族のヒエラルキーそのものが諸国民間の対立を醸成していることを、見抜くことはできない。Nationの問題は、カウツキーがはじめて検討の俎上にのせたのである。

V

マルクスについて、残された二つの問題について、簡単に述べよう。まず、第2章「世界史」における「単線的＝継起的な発展段階論」の問題。植村氏によれば、マルクス以後の多くのマルクス主義者は、「単線的＝継起的な発展段階論」に陥っているが、これは植民地支配の正当化のイデオロギーである「世界史」の思想への屈服であり、マルクスの思想と無縁のものである。植村氏は、『経済学批判』の「序言」における「アジア的、古典古代的、封建的および近代市民的」という諸生産様式の序列を、『要綱』における「アジア的、古典古代的＝ローマ的、ゲルマン的」という本源的所有の3形態論と関連させることで、マルクスが「単線的＝継起的な発展段階論」者ではないことを論証し、さらに1880年前後の「ロシア論」における、資本主義化論の妥当性の西欧への限定と結びつけ、中期マルクスと晩年のマルクスを、「非単線的」発展論者として一貫させ、さらにレーニンを「普遍的発展段階論」と規定し、レーニンにおいては「マルクスの思想は別のものに変質」と批判している。

マルクスにおける「単線的＝継起的な発展段階論」あるいは、「普遍的発展段階論」の問題は、1970年前後に日本でよく論じられたテーマである。当時の論争では、『資本論』「初版への序言」(1867年)にあるような「産業のより発展した国は、発展の遅れた国にたいして、ほかならぬその国自身の未来の姿を示している」という認識を、「単線的な発展段階論」と呼び、『要綱』や『資本論』の時期の中期マルクスがそれに該当し、晩年の「ロシア論」のマルクスの認識は、「多元的・多層的」(山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社、1969年)なもので、「複合的発展像」(淡路憲治『マルクスの後進国革命像』未来社、1971年)と呼ぶべきものである、と理解されていた。植村説は、この70年前後の通説をくつがえし、『要綱』のマルクスが「非単線的」発展論(淡路風にいえば「複合的発展論」)であったと主張するものになっている。だが植村氏には先行する山之内説や淡路説に対する言及はない。

「アジア的、古典古代的、封建的」な諸生産様式の序列の問題と、社会発展の道程において資本主義化を避けられるか否か、という問題は別の問題である。「資本主義に先行する」3形態を継起的な発展諸段階ではないというように理解したとしても、社会の発展において資本主義の段階を不可避であるとする考え方は成り立ちうる。中期マルクスの言説のなかに、資本主義を回避した社会発展が可能であるという命題が存在することを論証しなければ、植村説は成立しないのではないだろうか。植村氏は「インド論」を検討しているが、そこで言っているのは、マルクスとヘーゲルは違うということだけである。

最後に、マルクスのアソシアシオン論について。植村氏は、マルクスの構想したアソシアシオンは、「古い市民社会」に取って代わる社会の在り方なのであり、いわば階級対立のない「新しい市民社会」なのである」という。市民社会という言葉でどのような内容を盛り込むかによって、このような捉え方が妥当か否かは決まってくるので、植村氏のこのような議論をまったく誤りであるということとはできないかもしれない。しかし、わが国でよく使われる「共同体」と対比される意味での「市民社会」は商品生産社会を意味している。マルクスのアソシアシオンは非商品生産社会であるので、その意味での「市民社会」と呼ぶのは無理であろう。また「自由人の連合 Verein」というときのマルクスの「自由人」は、ホッブズやロックの利己的個人とは異質の、共同体的倫理を内面化された人間である。マルクスのアソシアシオン論は、「共同体」思想の一類型とみなされるべきであろう。

植村氏のマルクス主義理解には、1970年前後にわが国の一部の論者に見られたのと共通の傾向が見られる。それはマルクスとマルクス主義との間の本質的共通性に眼をつむり、両者の間にある差異を拡大し、マルクスと現実に存在する（した）マルクス主義運動やマルクス主義国家とが無関係であるかのように描く傾向である。このような傾向は現実のマルクス主義運動やマルクス主義国家に対しては批判的であるが、マルクスの思想を継承したいというマルクス主義者の傾向である。この傾向はマルクスの思想を特権化して、近代の諸思想とマルクスとの関係、マルクス主義者とマルクスとの関係を説明することに失敗してきた。植村氏のマルクス理解も私から見ると無理な点が見られる。マルクスもまた近代に現われた諸思想の一つであり、特権化することなく、観察と分析の対象とすべきであろう。

やや異論が多くなったが、それは本書が刺激的な書物であることをも示している。本書が社会思想史研究におけるエポック・メイキングな著作であることは疑いない。

(ナカニシヤ出版、2001年3月出版、A5版、300ページ、3500円)